

茶の湯文化学会会報 No.8

第8号/1996年1月15日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL.075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 生産開発科学研究所内 FAX.075-702-9314

美濃窯出土の白天目茶碗

愛知県陶磁資料館 井上喜久男

岐阜県多治見市小名田町・小名田窯下古窯跡群の六

号窯跡から白天目茶碗が出土した。
同古窯跡群は平成七年一月二十三日から三月一日まで市道法面補強工事に伴い発掘調査されたもので、室町時代後期（戦国期）の大窯三基と作業場跡、江戸時代の連房式登窯二基が検出され、白天目茶碗は大窯構造の六号窯跡から出土したものである〔注1〕。

出土した白天目茶碗は二つの釉薬のものからなり、白濁した長石釉系と考えられるもの二個体、灰釉系のもの三個体の計五個体が確認された。

長石釉系と灰釉系の二種類の白天目茶碗は形態的には異なっている。長石釉系の白天目茶碗は高さ六・二センチ、口径十一・八センチ、底径四・四センチのものと高さ六・〇センチ、口径十一・



白天目茶碗
小名田窯下6号窯跡出土(多治見市文化財センター蔵)
高さ6.2 口径11.8 底径4.7

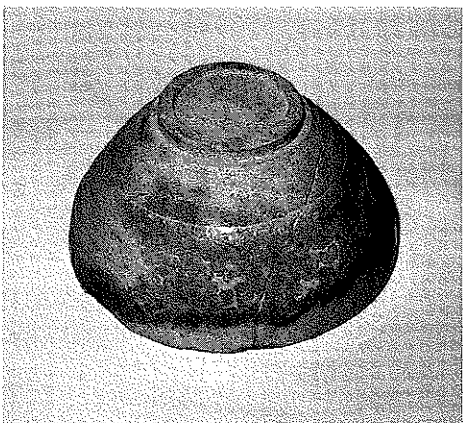
四センチ、底径四・七センチのもので、轆轤水挽き成形され、高台部から外側面の口縁部際までほぼ全域に

わたり篋削り成形が施されている。その篋削りは高台部から体部へと勢いがあり、輪高台に削られた地肌は削り痕が粗く残り、外端部には粗く面取りが施され、その一つには高台の外径が楕円形を呈して片薄高台となっている。体部は底部から口縁へ真つ直ぐに開き、口縁部で僅かに上方に立ち上がっている。口縁部は器壁が厚く、同端部に僅かに薄くなりながら延び、外方から丸く撫でられている。釉薬は灰の混じった長石釉と考えられ、僅かな黄味混じりの白色を呈し、焼成過度のためか釉溜まりの厚い部分が黄濁色に変色している。

この長石釉系の白天目茶碗は美濃・瀬戸窯の白天目茶

碗の型式と比較してみると、系列外であることが確認され、共伴した天目茶碗と灰釉丸皿の形態から大窯Ia期(二四九〇―一五一〇)に編年〔注2〕されるものである。

また、灰釉系の白天目茶碗はいずれも物原出土のもので、淡緑色の釉薬が施されている。口径十一・六センチの大きさのものは口縁部



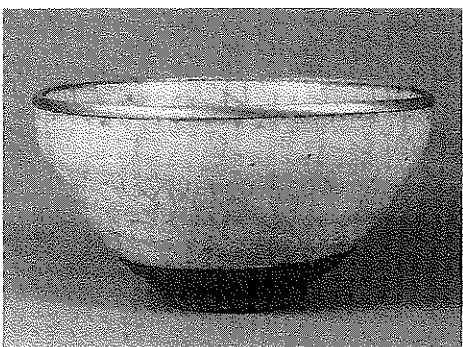
小名田窯下六号窯出土
白天目茶碗高台

が幅広くやや薄くなつて立ち上がり、同端部は内面から丸く撫でられている。高台部は別個体ではあるが、輪高台に篋削り成形され、高台端部の径が小さくなり、外端部には粗い面取りが半周ほど施されている。

従前の採集資料に拠れば、同古窯跡群の一号窯跡からは灰釉系の白天目茶碗が三個体出

土している〔注3〕。焼成良好の一つは底部から外側面に勢いがある篋削り成形が施され、高台外端部には面取りがあり、腰部から高台部には鉄化粧が施されている。釉薬は淡緑色を呈し、内面底部の釉溜まりは綺麗な緑色に、口縁周辺部は淡緑白色を呈している。

伝世品の白天目茶碗は紹鷗所持の三碗が有



白天目茶碗(前田家伝来)
高さ6.6 口径12.3 底径4.6

名であり、長石釉系一碗(加賀前田家伝来)と灰釉系(尾張徳川家・江戸福寿院伝来)に分けられる。

長石釉系の加賀前田家伝来のものは、口縁部の立ち上がりが緩やかで、口縁端部が外反する様であり、高台部の篋削り成形など大窯初期に編年されるものである。また、灰釉系

の尾張徳川家および福寿院伝来のものは碗形で、輪高台に篋削り成形され、福寿院伝来のものは口縁端部が外反する様である。

窯跡出土品と伝世の白天目茶碗を比較すると、長石釉系では、六号窯跡出土のものと同加賀前田家伝来のものとは口縁部の形態がやや異なっているものの、高台部の成形には近い



白天目茶碗(徳川美術館蔵)
高さ6.4 口径12.1 底径4.2

ものがある。また、灰釉系では、一号窯跡出土のものは形態的にはむしろ尾張徳川家伝来の総黄色に呈色している唐物黄天目茶碗に類似し、六号窯跡出土のものは尾張徳川家伝来の白天目茶碗に近い形態のものである。

美濃窯(小名田窯下古窯跡群)は白い茶碗の制作にあたって、白い釉薬として長石釉系

と灰釉系の二種類の釉薬の、両者あるいはどちらで制作を意図したのだろうか。

紹鷗所持の白天目茶碗は、美濃窯で白い茶碗の制作が意図され、白い釉薬として二種類の釉薬が素材として計画されたものとするれば、試作期における形態的にも個別的な型式を持つ作品群の中から選別されたものであり、年代的には一四九〇―一五三〇年(大窯Ia・Ib期)の時期に制作されたものと考えられる。その中で灰釉系の白天目茶碗は形態的には総黄色の「唐物黄天目」に近いものが存在することから、大窯初期の還元焰焼成により淡緑色に呈色することになったが、最初は黄天目茶碗の制作を意図していた可能性が思案されるところである。

今回の発掘調査によって、小名田窯下古窯跡群における白天目茶碗の焼成が再確認されたことになり、従前の一号窯跡出土資料とともに白天目茶碗の解明が期待され、発掘調査報告書の刊行が待たれるところである。

注1 多治見市教育委員会文化財保護センター「小名田窯下古窯跡群発掘調査現地説明会資料」一九九五・三・五

注2 拙書「尾張陶磁」ニュー・サイエンス社一九九二
注3 拙稿「美濃窯の研究―十五―十六世紀の陶磁生産―」(『東洋陶磁』十五・十六)一九八八

平成七年度大会報告

平成七年度の大会が、十一月十二日(日)午後一時より、約百八十名の参加を得て京都市左京区の「ホリデイ・イン京都」において行なわれた。

今回の研究報告は、コーヒープレイクを以て「松屋会記」における間中板の一考察―中間報告として―、「伝世品にみる呉須手香合・盤・呉須赤絵の生産窯跡―福徳省漳州窯平和県南五寨窯跡発掘調査成果から―」。「数寄の系譜序論―特に『山上宗二記』の数寄について―」。「幕末明治初期茶道史への一試論―大坂町人大庭屋平井家の茶会記を中心として―」。「修行としての茶の湯について―『山上宗二記』を手がかりに―」。「大目構えについて」の五報告。

研究報告のあと堀信夫氏の「芭蕉と茶」と題する記念講演があり、六時半からは、懇親会が行なわれ、報告者を中心にして歓談がなされた。

記念講演および各研究報告の概要は以下の通り。

記念講演

「芭蕉と茶」

堀 信夫

有名な『笈の小文』の冒頭の一節、「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道するものは一なり」という文章は一体何故書かれたのであろうか。元来、ここは莊子の「万物斉同」という思想にすべての物は、非常に大きな、宇宙的な根本原理のところから見るとすべて同じであるとする考え方、に心酔していた芭蕉がそのことを披瀝した箇所と考えられる。故に「貫道するものは一なり」という「一」とは、莊子のいう「一」(宇宙の根本原理)なのである。つまり、ここで芭蕉は、西行・宗祇・雪舟・利休の個々にそれぞれ共通するものがあるということ述べているのではなく、宇宙の根本原理から見ると、むしろすべて同じではないか、ということを主張しているだけのことと考えられるのである。

ならば、芭蕉と茶、芭蕉と利休の結び茶に共通するところがないかと言えはそうではない。その一つは「否定の論理」である。これはもともと仏教から打ち出されたものであ

り、名利を避けて佗を好むということになる。但し芭蕉の場合、更に莊子の否定の論理があることに注意しなければならない。次に「一座建立」という寄合文化の持つ共通性、特に一定の虚構の世界における自由・平等の保証とそれによる完全な人間の実現。これは俳諧の連句、茶の湯に共通するものである。三つめとして「数寄意識」があげられる。茶の湯の世界については言うまでもないが、芭蕉においても『俳諧問答』や『幻住庵記』にみられる様に、「数寄意識」は非常に基本的な要素として考えられている。四つめとして「道



具としての『季語』が考えられる。季語には縦の題と横の題があり、縦の題とは雪月花など時代を縦に貫いて伝統的にあるものをいい、横の題とはごく日常的なものを新しい季語として見出すことをいう。これは季の美しさの発見であり、茶の湯の世界においてすばらしい道具を発見し、また茶会でその喜びを共有する事と同様であろう。最後に取合わせがあげられよう。俳諧の連句や発句の取合わせの妙は一座建立の決定的な要因となるが、茶会においても道具組のみならず、主客の取合わせ次第で一座建立が決まるのではないだろうか。

発表1

『松屋会記』にみる間中板の一考察

— 中間報告として —

飯島照仁

茶会記における茶室関連の部分には、未だ解明されていない記述が散見される。特に『松屋会記』『天王寺屋会記』などの記載年次が早いところにそうした傾向が多々見られる。

そのような未解決な記載のなから、極めて未端的なものではあるが、「板」に焦点をあて、なかでも茶室構成にかかわると推測される「間中板」について考察した。ちなみに、

上記茶会記にみられる板の表現には板、大小板、小板、一枚板、薄板、丸板、四角板、中板、間中板、板畳、ヌクイ板、ヘンクワ小板等がある。

『松屋会記』における間中板の記載から間中板は点前をする時、風炉、釜、水指を置いていた板であることは推測できる。又、早い時期の四畳半と関わりがあったとも考えられる。

茶室構成にどのような関わる板であるのか資料はまだわずかであるが、今回の発表をふまえ、今後さらに検討を続けていきたい。

発表2

伝世品にみる呉須手香合・盤・呉須赤絵の生産窯跡

— 福建省漳州窯平和県南勝五寨窯跡

— 発掘調査成果から —

森村健一

長年、謎とされてきた伝世品や遺跡出土品にみる呉須手(青花)香合や盤、呉須赤絵(五彩)等の窯跡は、福建省漳州窯—スワトウ—ウエア—であると判明した。(※漳州窯の分布範囲とは平和県・華安県・漳浦県・詔安県に及び今後広東省北部に拡大する可能性を有している)

発表3

「数寄の系譜」序論

— 特に『山上宗二記』における

「数寄」について —

谷 晃

一九九四年一—二月に福建省博物館・南京大学の合同発掘調査によって、南勝花子楼碗窯山窯・五寨大龍(狗頭山)窯・二龍(黒魚秋公)窯の三基の実態を明らかにした。漳州窯系陶磁器の研究の発端は、一九八三年以降数次にわたり表面調査を繰り返して行われており、一九九三年以降は、檜崎彰一先生の御指導の下で日中共同研究チームを結成して発掘にあたった。

研究の基礎作業として、一九九四年二月福建省博物館、同年一〇月 京都でそれぞれ討論会を実施した。その成果を受けて、一九九四年一—一二月に発掘調査を実施し多大な成果を得た。発掘調査された窯跡は、いずれも一六世紀末—一七世紀前半代に生産していた事が判明した。

又、窯構造・窯道具を初めて知見することができ、韓国・日本窯業の伝播ともからんで新たな問題提起が成された。

今後、漳州窯の研究は、共同研究者だった故熊海堂先生が提唱された窯構造・窯道具を中心に、東アジアへの広がりや貿易(国際的な流通)を、中国からみた東アジア的視野にたつて陶磁器を通して研究を進めて行きたい。

数寄はもともと動詞の「好く」から転じたもので、本来はある対象を気に入って心がそれに向かうことや、その気持を表現する言葉であるが、それが平安時代末期頃から、詩歌管弦を「好き」になり、それらに没頭することを「数寄」と称し、その語が本来もつ不運や不幸の意味も重ね合わせ、さらに「透き」あるいは「隙」のもつ時間的余裕の意味も含め、身の不運をも省みず、閑居して詩歌管弦に没頭し、仏の道を求める生活を「数寄」と称するようになった。

特に連歌では「数寄」が重要なこととして繰り返し説かれ、かつ連歌論の中心課題のひとつとまで考えられたことから、連歌のことを「数寄」と称するようになった。その頃盛んになりつつあった茶の湯が、連歌と同じく「寄合」の座で行なわれたためか、茶の湯も「数寄」と呼ばれるようになり、十六世紀には数寄といえ、茶の湯をさすまでになっていた。天正十六年(一五八八)に成立した『山上

宗二記』では、「数寄」の語が頻繁に現れるが、そこでは「数寄」を、

- ①、「好き」
- ②、茶の湯一般
- ③、茶の湯のあるべき境涯・境地
- ④、③で規定した茶の湯で使用する茶道具を判定・選択する基準

の四種類の意味で使用している。さらに③を発展させた「佗数寄」こそが、茶の湯の最高の理念とされた。今後は歌論・連歌論における「数寄」の概念との比較を行ない、また『山上宗二記』以後、「数寄」の語がどのように使われたのかを引き続き検討していきたい。

発表4

幕末明治初期茶道史への一試論

— 大坂町人大庭屋平井家の

茶会記を中心として —

市村祐子

日本茶道史の研究は多くの先学により行われてきたが、幕末明治初期の茶の湯についての研究は僅少である。これは明治維新と急激な欧化という歴史的背景のもとで茶道界は衰退したと考えられてきたことと、史料発掘が困難を極めていることが起因していたと考え

られる。本稿で取り上げる大坂町人大庭屋平井家の十代平井二郎右衛門美英による『茶會々記集』は、故原田伴彦氏が「平井家の茶湯」の中で資料紹介を行っていることにより研究調査のてがかりを得ることになった。平井家は遠州流を嗜んでおり、この会記には慶応二年から明治十九年までの百三十一回の茶会について記されており、幕末明治初期の大坂における茶の湯を知る上で貴重な存在である。しかしその全容については、これまで研究者からあまり関心が寄せられなかったように思われる。そこでこれを翻刻し、茶道具と参会者及び、美英のはたした役割の三点について考察した。

先ず、道具については、掛物・茶杓・茶入に限定して考察した。掛物と茶杓は小堀遠州とゆかりのある人物を中心として集められている。ここで共通していることは、明治十五年頃を境に連続して同一道具が使用されていることである。「名物」道具は見られなくなり、家の事情により売却されたかと推測できる。茶入は、遠州流においてはあまり使用されない稟も多く使用されており、美英は流儀にこだわることなく自由闊達に道具立てを考え楽しんでいただくと考えられる。

発表6

大目構えについて

中村利則

大目構えについてはこれまで、「中柱をもつ大目構えは、台子はもちろんいかなる「棚物」も使用させない構えであって、いわば「棚物」を用いる点茶の方式が、いったん解体され、新しく建築的な機構の中に再編成されたとみられる」と、主として「棚物」との関連において論じられてきた。しかしそうした考え方は別に「大目構の原型は、……すなわち中柱を立て、袖に全部壁をつけ、点前座を客座に対しあたかも「次の間」のように隔てようという意図に基づいていたのである。つまり、道安間と同じく客に対する謙虚な姿勢を点前座に造形化することであった」などと、手前座の次の間化であるとも論じられてきた。

『山上宗二記』が提出する「長細イ三畳敷」は、実は深三畳大目であり、初めての大目構えとなろう。天正十五年正月十一日、そこに招かれた宗満は「利休 御会 大坂ニテ」として、「フカ三畳半」の座敷での会記を遺している。ところでこれまでの茶室研究において、「〇畳半」というのは「〇畳大目」のことと読み替えて考えられてきた。それは「山上宗二記」

次に参会者については、春海藤治郎ら道具商、高谷恒太郎や古筆了伸らの名も見える。ここから、美英の茶道界に於いて果たした役割は、社会の混乱期の中に於いて、新しい茶の湯の在り方を模索し、のちの「教寄者」の茶の湯への橋渡しをしたと考えられる。

発表5

修行としての茶の湯について

—『山上宗二記』手がかりに—

美濃部仁

茶の湯を修行の一形態と見る見方は、それを遊興と見る見方とならんで、古くから存在する。二つの見方の相違は、「何のために茶の湯の稽古をするのか」という問いを立てることによって明らかになるように思われる。茶の湯を遊興と見る場合は、その問いに対する答えとしてさまざまな楽しみを列挙することができる。しかし茶の湯を修行と見る者は、その問いに答えることが出来ない。このことは、修行というものの本質に由来する。修行の本質は自己変革に存する。自己変革は、たとえば自己改善とは異なり、自己自身の徹底的否定を要求するものである。手持ちの目標、理想を含めて自己を根底から否定し

に提出された「二畳半」についても同じで、指図にはつきりと三畳敷に描かれているながらも、それを指図の誤写との判断を優先させ、やはり二畳大目の座敷として論じられている。それは、客座側には丸畳一枚と、炉畳を含めて半帖畳二枚の、合わせて二帖分が敷き込まれ、手前座には下手に半帖一枚が敷き込まれていたために「二畳半」といわれたのであろう。

しかし斎田記念館本における「二帖半」図に描かれた茶道口の位置などをみれば、座敷構成は利休の「三帖敷」と同一で、それも道具の置き方からみて茶道口側を風炉先にした、いわゆる戻り手前をする座敷であったことが知られる。

斎田記念館本で二重線に表記されている部分には少庵が本法寺前に利休屋敷のものを写した「三畳大」と同じく、客座と手前座風炉先を隔てる仕切り壁があったことは明白である。しかし風炉先が半帖もあると、踏み込みとしても、また道具の置場としても、奥行が半間もあって深すぎるため、それを半分にして、奥行を小間半に切り縮めたのが、利休の大坂屋敷に初見される、いわゆる大目構えではなかったであろうか。

去ることによってはじめて、自己変革は成就され得る。したがって、修行としての茶の湯の目標を予め提示することはできない。修行がそのようなものであるがゆえに、修行者にとっては、先達および先達が試行錯誤の中で見出した修行方法が決定的意味をもつ。

『山上宗二記』には、孔子の志学、而立、不惑、知命、耳順、従心になぞらえて茶の湯の修行方法を記した箇所があるが、右のような観点から見ると、それはたいへん興味深く思われる。とくに二つの点に注目したい。

第一に、茶人としての成熟の道を記したその叙述に、一つの転回点（不惑における）を見て取ることができるといふ点。これは、さきに述べた「自己変革」に対応するものであると考えられる。

第二に、ここに示された道が、一方では、未熟から成熟への絶えざる向上の道でありながら、他方では、風躰をつくり上げつつそれを消してゆくという矛盾を含んだ道であるといふ点。このような事態の根底にあるものは、「何のために稽古をするのか」という問いを問いとして否定させるところのものと同じであると考えられる。

新刊紹介

谷 晃著『茶会記の風景』

河原書店刊 三八〇〇円

桃山から江戸末期までの主な茶人や宮廷・柳営、すなわち津田宗及から井伊直弼までを二十三項目にわけて、茶会記や諸資料を素材にその茶の湯の様子を語る書。各茶人の使用道具一覧や系図・略年表などが添えられているのも親切だ。巻末の現存茶会記一覧など、今や茶道史研究の必需品となった感のあるパソコンを駆使して出来上がった好著である。

川上宗雪・竹内順一・戸田勝久・中村利則編
『千家の茶の展がり—宗全・不白・宗達』

婦人画報社刊 一九〇〇円

利休以降のわび茶の広がりを久田宗全・川上不白・速水宗達の三人に焦点をあてて説いた書。江戸千家の一年間にわたる月釜茶道具や三人による好み道具・茶室など豊富なカラー図版が収められている。各編集委員のほか、久田宗也・久田家と宗全、速水宗楽・速水宗達の出自、長野裕「きれいな釜と佗び釜」、「不白筆記にみる不白の茶道観」などの論考や資料翻刻も付載。

理事会報告

平成七年度の大会に先立って本年第二回目の理事会が、午前十一時三十分よりホリデイ・イン京都で行われ、左記の議案などについて審議された。

一、委員の委嘱について

茶の湯文化学会の活動は年をおう毎に活発になっていくが、事務局の体制を整備し、これにきめこまやかに対応するため、会則に則って委員を委嘱する事となった。そのため新たに神津朝夫、原田茂弘、山田哲也の三氏を委員として委嘱する事が決定された。

二、『茶湯文化学』の審査制導入について

会誌の論文掲載については、現在「論文投稿規定」(第二号巻末に掲載)によっているが、時代の趨勢に鑑みて、論文などの掲載に関しては査読を経た後に掲載する方向をとる事となり、そのための審査規定を検討することになった。規定原案ができ上がり次第、審議を経て規定が実施される予定である。

その他、大会関係、東京で行われる研究会や会誌・会報などについての報告があり、理事会は終了した。

研究会予告

第四回研究会は、学会の行事としては初めて東京で開催致します。とくに関東方面の方の参加を期待しております。

なお詳しくは、別にお送りした研究会のご案内をご覧のうえ、同封の葉書で参加・不参加の返事を学会事務局までお知らせください。

日時 平成八年二月十七日(土)

場所 国際文化会館(案内地図参照)

参加費 無料(但、参加は会員に限る)

次第

受 付 午後十二時半～

研究発表 午後一時～五時半

1 室町時代喫茶史に関する一考察

― 禅院茶礼の書院座敷への移行 ― 永田尚樹氏

2 織田信長の名物狩について 竹本千鶴氏

3 俳諧の茶の湯・興業の実態

― 『むかし合』所収

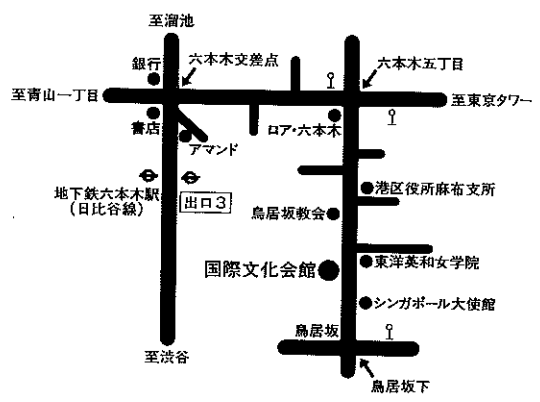
「はいかいの茶の湯」を中心に― 矢野夏子氏

懇親会 午後六時～八時

(懇親会費 五千円)

国際文化会館

106東京都港区六本木5-11-16 TEL.03-3470-4611



事務局報告

*あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願い申し上げます。

*会報第八号をお届けします。当学会も発足以来あしかけ三年を経過し、各行事が軌道に乗ってきました。今年からは、東京での行事も行ないますので、とくに関東方面の方を会員にお誘いください。なおまだ平成七年度分の会費をお納めいただいていない方がありますので、至急お納めくださいますようお願い申し上げます。